



2023としはたちのつどい
企画検討会メンバー

足立愛恵 (あだち めぐみ)

2002年(平成14年)豊島区生まれ。小中学校6年間を豊島区立の学校で過ごす。現在、東京理科大学の2年生。小さい頃からスポーツが好きで、今大学で水泳サークルに入り活動している。



■嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え
岸見 一郎・古賀史健／著
ダイヤモンド社 2013年

新成人の一冊

「自分らしくいること」

私は保育園・小学校時代に1学年20人もいない家族のような小さな世界で生きていました。そこから中学・高校に上がり140人・240人と人数がどんどん増えていき、人見知りだった私は新しく友達を作るのに苦労しました。一日学校で一言も言葉を発しない日もありました。そんな時に出会った私にとって大切な本が、岸見一郎と古賀史健が書いたアルフレッド・アドラーの「アドラー心理学」を解説している『嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え』という本です。

この本をはじめて読んだのは私が高校1年生の頃で、私が人間関係で悩んでいることを知った友人が勧めてくれた本でした。この本は高校時代何度も繰り返し読んだ、私にとって支えになったと言える本です。当時本を読むのがあまり好きではなかった私は最初読むことにあまり乗り気ではありませんでした。それでも、読み進めていくと自分の考え方や捉え方が変わり気持ちになりました。

この本の中で「課題の分離」について触れています。課題の分離とは、その課題が誰のものなのかを考えることです。例えば「相手を信じること」これは私の課題ですが、「私の期待や信頼に対して相手がどう動くか」は他者の課題であるということです。こうした他者の課題までもを荷物のように抱え込んでしまうと人生が辛くなってしまうので、「ここから先は自分の課題ではない」という境界線を知ることによって人生を軽くできます。周りの目を気にして自分の意見が言えなかった過去の私に「今あなたが悩んでいることはあなたの課題ではないよ」と言ってあげたいです。他者は自分の期待を満たす為に生きている訳ではないし、自分は他者の期待に応えるために生きているわけではないのです。

この本は、周りを気にせず自分を信じて行動してよいと気づかせてくれました。私はまだ、20年間しか生きていないのでこれからもっとたくさん本を読み、「生涯の一冊」を見つけていきたいと思っています。



図書館と私 ⑤

～まちの中での場の創出～

第4回
(全4回)

豊島区立巣鴨図書館 司書

「本と共に心と心を交わす場所
柔かい『輪』が生まれる場所」

皆さんは、これからの図書館にどのようなことを期待されますか？図書館は人と本とを繋ぐ「場」、それは今までもこれからも変わることはありません。ですが今、豊島区立図書館は、人だけでなく、地域や文化施設、企業など、もっと多くのものを本によって繋ぐ、大きな「輪」になるために転換しようとしています。

図書館では今年、『にぎやかな公共図書館』というキャッチフレーズのもと、基本計画を策定いたしました。「あれ？図書館なのににぎやか？」と不思議に思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。実は私もその一人でした。ですが、ここでのにぎやかというのは騒がしいという意味ではありません。誰でも気軽に使うことができる、いきいきとした場でありたい、という姿勢を表した言葉なのです。例えば、前号でもご紹介したような公園に本を運ぶという活動に加えて、デパートの屋上でお茶会を開催しています。また、ファーマーズマーケットでは本のリサイクル市、博物館や商業施設とはコラボイベントをと、図書館から飛び出して、地域に根ざした「輪」を広げようとしています。これらの活動も、一人でも多くの方に本に親しんでいただきたいという思いからです。と同時に、魅力的な図書館であるためには、地域の力を活かし、街に開かれていくことが必要だからです。

私が勤務する巣鴨図書館では、前庭で花や野菜を育てています。素人の私達が世話をしているので、間違えることもしばしば。そうすると、植物に詳しい利用者の方がアドバイスをくださったりもします。カウンターでも「あの花がきれいに咲いた」とお声をかけていただくことも。こんな小さな結びつきからも、地域の皆さんの憩いの場所になっていけるのかもしれない。図書館とは、人や地域を本だけでなく心でも繋いでいくものではないのでしょうか。本と共に心を手渡す、その柔かい「輪」が広がっていくにぎやかな図書館の未来に、今からとてもわくわくしています。

Café KONOHON
この本カフェ

30杯目

JR東日本池袋駅構内に石像「いけふくろう」が設置されたのは、1987年のこと。以来、待ち合わせ場所として親しまれている。

ふくろうは、ギリシャやローマの神話では知性や芸術を象徴する生き物である。本を読む文化は、「いけふくろう」を擁する豊島区池袋にこそふさわしい。

今回のテーマ

ふくろう



書名『ハリー・ポッターと賢者の石』

J.K.ローリング／著 松岡祐子／訳
ダン・シュレジンジャー／絵
静新社 1999年12月

20世紀の末からたくさんの人に読み続けられ、映画や舞台作品にもなっている「ハリー・ポッター」の孤児のハリーは11歳で魔法学校に入学する。魔法使いとして成長し、両親の仇と戦い、強く生きる。彼のペットである白フクロウの「ヘドウィッグ」は生涯を通して忠誠を示し、ちからになる。魔法界の伝書鳩のようなふくろう使。人間と動物を越えた友情に感動！「夢と希望」まさに異世界ファンタジーの醍醐味を堪能できる。☞【辻 宏子(つじひろこ)】



書名『ちょっとだけまいご』

クリス・ホートン／著 木坂涼／訳 BL出版
2012年10月

巣から落ちてお母さんとはぐれてしまったチビフクロウ。リスと一緒に森の中を探し回る。チビフクロウが巣から落ちる場面には、半ページ縦に切れた仕掛けがあり、またチビちゃんを探すお母さんの影がうつすら描かれているページもあって楽しませてくれる。

お子さんを膝に乗せて、一緒に笑ったりドキドキしたり～チビちゃんがお母さんに出会えて抱き合うシーンで、ぎゅっとお子さんを抱きしめてあげたら、幸せ気分が倍增しますよ。

☞【中冨 邦子(なかとみくにこ)】



書名『フクロウの家』

トニー・エンジェル／著 伊達淳／訳 白水社
2019年2月

フクロウ好きですか？絵は好きですか？図鑑は好きですか？全部盛り！

著者は作家、画家、彫刻家。彼の素晴らしいイラスト(約100点収録)だけでも堪能できます。この始まりはシアトル郊外の森の近くに引っ越して、窓から見える杉の木に巣箱を取り付けたらフクロウのつがいに来たこと。フクロウと文学、美術への影響、人間との共生、そして北米に生息する19種のフクロウの詳細な生態を記録した、愛と共感に満ちた観察エッセイ。

☞【酒井 一夫(さかいかずお)】



マンガ・アニメで多文化理解?

～7つの国と地域の学生がお互いの文化を楽しみながら学び・共感したことは～

「東アジア文化都市2019豊島」でも、西安(中国)と仁川(韓国)と豊島区をつないだ一つの文化が日本のマンガ・アニメ。多文化共生の視点で一度読み終わったマンガ・アニメを手にとると…。そこには「相手を知る・自分を知る」新たな発見が!!

「鬼滅の刃」研究から、大正時代の文化融合発見!

東京外国語大学言語文化学部卒業生

高藤 郁咲(たかふじいくえ)



私は、「鬼滅の刃」から日本文化を探究することで、この作品の舞台である「大正時代」のある特徴的な側面を発見することができた。それは、大正時代に見られる文化の融合は、おしなべて、西洋の要素が強い形で進んだということだ。この背景には、明治時代の文明開化が大きく関わっている。明治時代に、人々は西洋に憧れを強く抱き、西洋文化を受け入れた。その風潮が大正時代まで続いたため、この時代に文化融合したものは、西洋の要素が強くなったのだと考えられる。西洋に寄せる形で文化融合が進んだ例として、洋食が挙げられる。洋食の代表、「オムライス」、「コロッケ」、「カレーライス」などの料理名には、日本語ではなく、西洋の言葉が使われている。見た目においても、日本の「和」の要素が見当たらない。このような大正時代の「自文化の要素を最小限にし、他文化を前面に押し出す」という特徴は、一緒に研究を行ったグループメンバーの国(大正時代と同時代の韓国、ベトナム、ブラジル)では見られなかった。そのため、これは、この時代の独特のものであるといえると思う。このような文化融合の例をたくさん探することができるのは、「鬼滅の刃をもっと楽しむための大正時代便覧」である。この本では、

「鬼滅の刃」で見られる例を切り口にして、大正時代の服装、建築、食べ物などが詳しく紹介されている。そのため、この本は「アニメ・漫画を通して日本文化・社会を知る」に最適なので、ぜひ手に取って、読んでもらいたいと思う。

私は、プログラムの中で、多様な文化背景を持った学生と研究したおかげで、自分だけでは気づけなかったような日本の特徴を見出すことができた。というのも「日本人」とは違った視点を持つ彼らが、自分の国と日本を比較し、相差点や相違点を発見してくれたおかげで、客観的に日本文化・日本社会を眺めることができたからである。非常に貴重な体験だった。

そして、プログラムを通じ、私は、ある重要なことに改めて気付かされた。それは、当たり前にも聞こえるかもしれないが、「丁寧に順を追って、自分が思っていることを話す」ということだ。というのも、普段、家族、友達などの「同じ文化背景を持つ」人との会話では、自分の意図していることが伝わっているかどうかを不安に感じたことがなかった。しかし、今回のプログラムでは、それが伝わっておらず、話し合いがうまく行かないという場面がしばしばあった。そのため、人とのコミュニケーションにおいては、自分が思っていることを、丁寧に順を追って話すことが、重要なのだと改めて感じた。そして、自分が思っていることが相手に通じて初めて相互理解が始まると思われるので、様々な文化を背景に持っている人々が共生し、互いに理解し合える社会の実現には、これが重要だと思った。

監修 東京外国語大学 大学院国際日本学研究院
准教授 幸松 英恵(ゆきまつ はなえ)

プロフィール: 専門は日本語学。豊島区図書館経営協議会委員。

YouTubeで
動画も配信中!!



東京外国語大学オープンアカデミー短期日本語・日本文化研修プログラム「アニメ・マンガを使って探求しよう!」受講学生の連載コラム。2022年(令和4年)1月～2月、東京外国語大学にてオンライン日本文化研修が実施された。国内外の学生がZoomで繋がり、アニメ・マンガから日本文化の特徴を探究した。

図書館から見る豊島区の歴史

図書館というものは、これまでどのような道をたどり、今後どのような役割を果たしていくのでしょうか。区制施行90周年を迎えた豊島区の区立図書館が歩んできた歴史を振り返り、未来へ向けた展望をご紹介します。

豊島区立図書館の未来

「にぎやかな公共図書館を目指して」

豊島区立中央図書館長 倉本彩子(くらもと さいこ)

平成29年4月、「豊島区立図書館基本計画」がスタートしました。「子どもから大人まで知的好奇心を満足させる図書館～区民の学習・情報センターとして」を基本理念に掲げ、来館者、貸出冊数、登録者数、蔵書数を増やしていくことを目指しました。

この年、区立図書館全体の来館者数は2,088,598人、貸出数は2,238,171冊と、多くの方に利用していただき、着実に計画が進みました。

ところが、新型コロナウイルス感染症の流行。誰でも自由に利用できるはずの図書館は、これまでに経験のない、「利用制限」を実施せざるを得ない状況になりました。図書館内は返却された本であふれ、おはなし会もない、書架にも入れない、閲覧席も使えない図書館の日々。私たち職員も先行きが見えず、「この状況がいつまで続くのだろうか」ととても不安でした。

しかし、振り返れば、この経験は改めて図書館の意義を考える貴重な機会でした。休館中「図書館を開館してほしい」という声を本当にたくさんいただき、こんなにも図書館を必要としてくれる人がいるんだと、とてもありがたく思いましたし、みなさんコロナへの不安や感染防止対策で大変な状況にも関わらず、多くの方が図書館の必要性を言葉にくださったことで、緊急事態宣言が繰り返される中でも「図書館は開館」の方向に変わっていきました。

ただ、図書館には、子どもの姿がめっきり少なくなりました。これまでのように、部屋に集まってワイワイ楽しむイベントや、大勢の子どもたちでにぎわうおはなし会の再開は難しく、とても寂しい図書館になってしまいました。

今まで当たり前のようにできたことができなくなっている、でも、新型コロナウイルス感染症の流行が3年と続くと、生まれたての赤ちゃんも3歳になります。子どもの文字活字離れが課題と言われる中、このままではいけないと、図書館だけでなく多くの人が子どもの未来、そして日本の将来を心配していたと思います。

令和4年3月に改定した「豊島区立図書館基本計画(第二次)」は、こうした様々な経験を踏まえ、「にぎやかな公共図書館をめざす」サブ理念を明記しました。

赤ちゃんから大人まで、多くの人に来てもらえる図書館をめざす。本が人と人をつなぎ、図書館が家でもなく職場でもない、本を通じた第三の居場所「サードプレイス」になればと思います。小さな子どもが面白い本を見つけて思わず笑ったり、兄弟で本を読み聞かせたりする場面、とても区立図書館らしい、温かい景色です。「こんにちは」のあいさつ、新聞や雑誌をそっとめくる音、静かだけにぎやかで明るい、「音」のある公共図書館、みんなで作るみんなの図書館をめざしています。「なんだか、ほっとするなあ」と感じる、お互い様で温かい図書館。このイラストのように、図書館は外にも出かけていきます。そんな図書館になれば、にぎやかな公共図書館の完成です!



「にぎやかな公共図書館イメージ」

© 織田博子 Illustrated by Hiroko Oda

図書館の仕事は面白い！

葛飾区副区長 植竹 貴 (うえたけたかし)



昨年、豊島区制施行90周年、おめでとうございます。元職員の豊島区が更に発展されますよう祈念いたします。さて、タイムマシンに乗ったように時代を遡っていくと・・・

19年前、私は豊島区の中央図書館長に着任した。今振り返ると図書館の仕事は面白い。それなりに頑張れば何とかなる仕事かもしれないが、突き詰めて頑張ると終わりが無い仕事である。正解がないから面白い。

例えば購入図書の見直し。人気本を果たして何冊まで購入するか。高価だが貴重な学術本、今後数年で数人の学生しか読まないかもしれない本を購入するか。選書ひとつ取っても正解はない。図書館運営にしても、公務員が運営する所があれば、民間委託や指定管理者による運営もある。開館日も元旦に開館する所があれば、年間開館200日を切る私立図書館もある。図書館運営にマニュアル的な正解はない。そこで、どこの自治体も、図書館の基本を踏まえつつ、独自の考えで運営内容を永遠に微調整し続けているのだ。

ところで、館長は現場の司令官として運営面での設計図を描く立場だ。しかし、粗い図面は描けても館長だけでは何も進まない。設計図を仕上げて実際に動かすのは職員だ。私は別の自治体から来たので役所の人を知らなかった。そこで、全図書館員と面接して「〇〇分野に詳しい人がどこにいる」「あそこには元図書館員がいる」などの情報を収集した。こうして新中央図書館の開館準備や、既存の図書館を前進させるための人集めをした。現役の館員も大きく配置し直した。

19年前は財政状況が厳しく、常に金策を考えながら運営内容を決めていた。ちょうど新中央館の書架設計の最中だったが、書架も備品も結構な金額になった。また、地域館の運営等を検討している中で、将来の地下鉄新駅の出口を考え、雑司が谷図書館の図書貸出コーナーへの切り替えを検討開始させて頂いたりもした。

思い返してみると悪戦苦闘する場面が多かった。今だから面白いと言えるので、あの頃の私がこれを読んだら違う反応かもしれない。最後に間違いなく言えること。私が何とか図書館を運営することができたのは、もう現場職員の奮闘努力のおかげとしか言いようがない。図書館運営に正解はないが、図書館はやっぱり人だ。人次第で面白くなるのだ。だから今、当時の豊島区の図書館メンバーに感謝したい。ありがとうございました！

1988年(昭和63年)、葛飾区入区。2004年(平成16年)から2年間、豊島区の中央図書館長を務める。その後、葛飾区の文化国際課長や区長室担当部長等を経て、2022年(令和4年)より現職。

豊島区制施行90周年記念「図書館通信」最終号にて、豊島区立図書館に関わってくださった方々に記念メッセージをご寄稿いただきました。

本と図書館がつながく、「ひと」「未来」

株式会社サンシャインシティ 代表取締役社長 合場 直人 (あいばなおと)



豊島区制施行90周年の一年は、長きにわたり紡がれてきた歴史や文化、地域活動など、豊島区の多くの財産をこれまで以上に肌で感じています。そしてその懐の深い土壌で新たな文化や活動も生まれ、次の100周年に向けて期待が膨らむ、実り豊かな一年と感じるばかりです。

サンシャインシティは、これまで見守り育てて下さった皆様のおかげで、今年、開業45周年を迎えます。社史を紐解くと、社の設立当初から「児童を中心とした、未来に向けた『ひとづくり』」が理念の一つにあり、現在まで「なんか面白いこと、ある。」をスローガンに、ハード・ソフトの両面から文化・文教面にも力を注いできました。こと「本」「図書館」に関しては、昨年度、若手社員が中心となり「サンシャインシティ 絵本の森」という家族向け企画を開始しました。絵本を読んだり、読み聞かせを楽しんだりできる広場を設け、多くの方に親しんで頂いており、また、お客様の家庭にある絵本をお預かりして子ども家庭支援センターにお渡ししたり公園等でお配りしたりと、本を通じて地域の輪が広がればという思いを込めた活動をしています。利用される方の笑顔に触れる度、私自身も嬉しさが増すと同時に、本の魅力と可能性を大きく感じます。

本や図書館は、歴史や文化を受け継ぎ、地域社会や自身と深く向き合える魅力があります。そして今、さらに願うのは、本や図書館を通して益々豊かな出会いやコミュニケーションが生まれてほしい、ということです。区制施行100周年に向けて、いま豊島区は、「ひと」が中心のまちづくりが大きく進んでいます。歴史や文化の宝庫である本や図書館を通じて「ひと」と「ひと」がつながり、その輪が広がるまちと未来を、皆でつくっていただければと思います。



親子でにぎわう「サンシャインシティ 絵本の森」

1954年(昭和29年)、東京都生まれ。小樽商科大学卒。三菱地所㈱で横浜・丸の内など数多くのまちづくりプロジェクトに携わり、2018年(平成30年)より現職。趣味は街歩きで、豊島区の区境もぐるりと1周制覇。

図書館カレンダー

開館時間 1月 一睦月 2月 一如月 3月 一弥生

○は土日祝の開館時間 ■は休館日

中央図書館	1月							2月							3月						
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
平日 午前10時～午後6時	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4				1	2	3	4			
土日祝 午前10時～午後6時	8	9	10	11	12	13	14	5	6	7	8	9	10	11	5	6	7	8	9	10	11
	15	16	17	18	19	20	21	12	13	14	15	16	17	18	12	13	14	15	16	17	18
	22	23	24	25	26	27	28	19	20	21	22	23	24	25	19	20	21	22	23	24	25
	29	30	31					26	27	28					26	27	28	29	30	31	

駒込・上池袋・千早図書館	1月							2月							3月						
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
平日 午前9時～午後6時	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4				1	2	3	4			
土日祝 午前9時～午後7時	8	9	10	11	12	13	14	5	6	7	8	9	10	11	5	6	7	8	9	10	11
	15	16	17	18	19	20	21	12	13	14	15	16	17	18	12	13	14	15	16	17	18
	22	23	24	25	26	27	28	19	20	21	22	23	24	25	19	20	21	22	23	24	25
	29	30	31					26	27	28					26	27	28	29	30	31	

巣鴨・池袋・自由図書館	1月							2月							3月						
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
平日 午前9時～午後6時	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4				1	2	3	4			
土日祝 午前9時～午後7時	8	9	10	11	12	13	14	5	6	7	8	9	10	11	5	6	7	8	9	10	11
	15	16	17	18	19	20	21	12	13	14	15	16	17	18	12	13	14	15	16	17	18
	22	23	24	25	26	27	28	19	20	21	22	23	24	25	19	20	21	22	23	24	25
	29	30	31					26	27	28					26	27	28	29	30	31	

雑司が谷図書館貸出コーナー	1月							2月							3月						
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
平日 午前10時～午後5時	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4				1	2	3	4			
土日祝 午前10時～午後7時	8	9	10	11	12	13	14	5	6	7	8	9	10	11	5	6	7	8	9	10	11
	15	16	17	18	19	20	21	12	13	14	15	16	17	18	12	13	14	15	16	17	18
	22	23	24	25	26	27	28	19	20	21	22	23	24	25	19	20	21	22	23	24	25
	29	30	31					26	27	28					26	27	28	29	30	31	

※ 新型コロナウイルス感染症防止等のため、開館日時が変更となる場合がございます。

区制90周年記念事業 フェス 「にぎやかな図書館祭」 大正大学附属図書館 × 豊島区立図書館



区立図書館司書によるおはなし会

豊島区立図書館は、多くの人に身近な場所で、多くの人に利用される「にぎやかな公共図書館」をみなさんと一緒に作り上げていく取組を進めています。

11月3日～5日に、区内の大正大学附属図書館とともに「にぎやかな図書館祭」を開催しました。

「おはなし会」「ブックカバーづくり」「図書館見学ツアー」など、地域の方にひらかれたイベントを大学・学生ボランティア・区立図書館司書がタッグを組み企画をし、多くの方に楽しんでいただきました。また、最終日には、出版社や図書館関係者による座談会フォーラム「本を通して“人”がつながる」より、それぞれが考える「にぎやかな図書館」を発信しました。「図書館」という共通のキーワードをもった大学と区が、新たな協働の場をつくりあげた3日間となり、多くの人が集う「にぎやかな図書館祭」になりました。



YouTubeで動画も配信中!!



大正大学附属図書館と巣鴨図書館をつなぐスタンプラリー

編集後記

今号が90周年記念号の締めくくりです。全4回で、多くの方々に区立図書館の「歩み」と、「これから」をご寄稿いただきました。周年記念でカオスだけドキュメントな豊島区らしいプラットフォームになるな。これからも「本」が人と人をつなぐ、そんな「まち」でありつづけますように…。次号から始まる新執筆によるエッセイをお楽しみに!! (坂)

「図書館通信」は豊島区公式ホームページに毎月掲載しています。

